教育ニュース「三元　夢求」 No.23

今週の児童川柳　「楽しみだ　いろんなことが　待っている」（３年生作）

平成 23 年２月 25 日　広島市立吉島小学校

春の陽ざしが強さを増すなか、もうすぐ弥生の季節。児童から校長室に、おすすめの本を紹介する「読書ゆうびん」（図書委員会児童の活動による）が届く。児童の読書意欲に負けまいと、紹介してくれた本を読んでみる。読むと心がぽかぽか、思わず、ふきだしたり「ありがとうね」って呟いたりしてしまうものが多い。例えば、２年生のおすすめ詩集には、こんな内容が。

> 「校長室のしゅうじ」（作：高知県の２年生）
> 校長室に行ったら　校長先生がしゅうじをしよった。
> お手本用紙をよこにして書きよった。
> わたしが　「むずかしくない」ってきいたら
> 「こんなのかんたんよ」とへいきなかおやった。
> でも　よこにはまちがえた紙がいっぱいあった。
>
> 「先生いつも元気だね」（作：神奈川県の２年生）
> 「先生いつも元気だね」ってぼくがいったら
> 「そうでもないよ」って先生がいった。
> そして「先生がかなしそうにおはようって入ってきたら　み
> んなかなしくなるでしょう」と。
> （中略）
> でも　むりしなくていいよ。
> たいへんなときは　ぼくがてつだってあげるよ。

『ユーモア詩集１』より

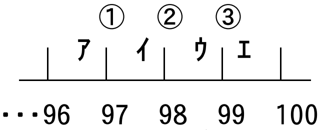
児童のおかげでよい詩集に出合うことができました。

ところで、ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱの方や先生たち、図書委員会児童による読み聞かせの活動とともに、このような「読書ゆうびん」の輪の広がりで、100 冊読破の児童が増加中。また、図書室横の「読書ﾁｬﾚﾝｼﾞの木」にも多くの児童の名が並ぶ。

算数の時間、みんなで誤答から学び、理解（ｱﾅﾛｸﾞ＋ﾃﾞｼﾞﾀﾙ）を深め合う１年生。

「この答えになったわけを、みんなで考えてみましょう」。これは、学習問題『96 は、あといくつで 100 になるでしょうか』に対して児童が３種類の解答をだしたことから生まれた児童への問いであり、今日の学習のめあてである。

その解答とは、$\boxed{3}$、$\boxed{4}$、$\boxed{14}$ である。$\boxed{3}$と$\boxed{4}$を導き出した児童はいずれも、数直線を利用して解を求めている。



$\boxed{3}$は、96 から 100 の間に数の位置を表す縦線が３つ（図の①～③）あることから、$\boxed{4}$は、96 から 100 の間が４つ（図ｱ～ｴ）あることから導き出している。それぞれ解の根拠を発表・交流した子どもたちは、その後、96 ＋３＝、96 ＋４＝の計算処理は、この段階では未学習によりできないため、数直線の目盛りをすごろくの要領で、「１・２・３・（４）」と言いながら指で押さえ、どの数値に止まるかにより、どちらが正答になるかを全員で確かめ合った。$\boxed{3}$　と解答した児童からも納得したうなずきが。

数直線は、数の大小とともに、数の順序や系列（10 とびなど）を直観的にとらえることができるもので、たし算やひき算にも数直線が利用できること（計算処理の道具の一つであること）を実感させる必要がある。しかし、数の大きさを具体的にとらえることができにくいため、担任は、その後の指導で、96 ＋３では 10 のかたまりが 10 こできない（100 にならない）こと、あと１こたりないことを、ﾌﾞﾛｯｸを用いて再度確かめる学習を補充するようである。

全員で、だれもがつまずきやすい解答例が正しい答であるか、答えの行き先やそうなる理由を吟味し合うことは、理解をより深めることにつながるであろう。加えて、どんな問題でも活用・応用できる学習力となるであろう。だからこそ、いわゆる誤答は、貴い学習材と言えるのではないでしょうか。授業では、今後も大切に活用してまいります。